

女人無限

岡部伊都子



女人無限

岡部伊都子

創元社

女人無限



著者岡部伊都子
市北区西天満一丁目四番二
号矢部文治印
区天満一丁目九番一
井二郎発行之
天満一丁目四番二
創元社

©昭和五四年一月一日一刷

1979 Printed in Japan (安田製本)

0095—931091—4202

装幀・山高 登

本文写真・著者

伊都子著書目録

紅しぼり	鉄道弘済会	26・1・10
おむすびの味	創元社	31・5・1
続・おむすびの味	創元社	8・15
いとはんさいなら	創元社	32・3・1
蠟涙	創元社	8・20
言葉のふれぜんと	創元社	33・5・20
ずいひつ白	新潮社	34・9・30
十代の質問	創元社	12・10
いのちの髪	新潮社	36・6・25
観光バスの行かない……埋もれた古寺	新潮社	37・6・5
占都ひとり	新潮社	38・3・25
花の寺	淡交新社	10・19
風さわぐ かなしむ言葉	新潮社	39・3・20
関西文学散歩「共著」	NHKブックス	8・20
続・花の寺	淡交新社	40・2・26
みほとけとの対話	淡交新社	4・22
美の巡礼	新潮社	6・15
秋篠寺法華寺	淡交新社	9・17
美のうらみ	新潮社	41・5・30
奈良残照の寺	淡交新社	6・20
京の寺	保育社	11・1
女人歳時記	河原書店	42・3・20
美を求める心	講談社	11・11
仏像に想う「共著」	朝日新聞社	43・3・10
鳴滝日記	新潮社	4・5
抄本おむすびの味	創元社	9・10
水かがみ	淡交社	10・13
わが心の地図	創元社	44・7・20
列島をゆく	淡交社	45・1・13
おりおりの心	大和書房	3・31

鈴の音	創元社	45・4・15
女人の京	新潮社	4・25
花の大和路	朝日新聞社	46・5・20
蜜の壺	創元社	9・1
二十七度線 沖繩に照らされて	講談社	47・3・28
心象華譜	新潮社	6・25
秋雨前線	大和書房	9・30
難波の女人	講談社	48・3・6
御伽草子を歩く	新潮社	4・25
女人歳時記・京の韻	角川文庫	5・10
カラー花の寺 京都	淡交社	10・29
カラー花の寺 奈良	淡交社	12・1
仏像に想う 上・下 (共著)	講談社	49・5・30
西山の道	保育社	7・1
京の寺 (大判)	保育社	7・1
北白川日誌	新潮社	7・15
観光バスの行かない……	新潮文庫	50・2・28
ころをばなににたとえん	創元社	3・10
玉ゆらめく	新潮社	6・15
四季の菓子	読売新聞社	7・15
あこがれの原初	筑摩書房	9・20
私たちの風景 (共著)	毎日新聞社	11・30
京の手みやげ	新潮社	51・7・10
紅しぼり (復刊・愛蔵版)	創元社	7・20
紅しぼり (復刊・限定版)	創元社	7・20
京の川	講談社	7・30
小さなこだま	創元社	52・4・10
京の里	講談社	9・5
花のすがた	創元社	9・20
小さいいのちに光あれ	大和書房	53・7・30
美を求める心	講談社文庫	8・15
京の山	講談社	10・12

伊都子著書

抄 本 おむすびの味	380頁 1300円	四六判
鈴の音	260頁 1300円	
蜜の壺	270頁 1300円	
こころをば なににたとえん	250頁 1200円	
小さなこだま	280頁 1300円	
花のすがた	220頁 1400円	
紅しぼり	A 5 判 3000円	和装・箱入
わが心の地図	230頁 300円	小B 6 判

目次

山姥 3

漆部造の妾 19

好色一代女 36

橋姫 54

墨染 71

あきみちの妻 87

上村松園 104

伊香小江の天女

122

如意尼

139

廃后高子

156

安里屋クヤマ

172

與謝野晶子

189

高野夫人

205

あとがき

231

女
人
無
限

山 姥

「明日『山姥^{やまうば}』を観るの」といったら、「山姥はここにいるやないの」と笑われた。なるほど、老いさらばえていよいよ鬼気迫る魔性の女。だが、神気ゆらぐ深山にひとり住みついたり、天空遊行の境に達したりはとうていなし得ぬ中途半端な小妖怪は、山姥とよばれて心がふるえる。山姥にくらべて、あまりにお粗末な、町姥である。

幼い時、母から聞かされたのは、山の靈気の化身とも思われる山姥の大きな風格だった。どういうわけか、里のおとぎともいうべき昔話には、山姥が悪婆の役をおしつけられていることが多い。気高い老女の風格を心にもっ

て読むと、とんでもない話である。見えすいた嘘をつき、あさましく欲張りで、卑小でいやしい。なんとなく気高い大母性を連想してきた者は、腹が立つ。

坂田公時きんときの母とされる山姥は、生れつき力持ちの金太郎を、山の動物たちと仲よく遊ばせ、すくすくと育てた。最近の絵本には昔話をすっかり変えて、山姥が金太郎に遊ぶことを禁じ「勉強しなさいよ」としつけるようになって、いるものがあつた。動物たちを追っぱらって机に向つてゐる金太郎なんて、まったく魅力がない。母たる山姥の大きさをも踏みにじる。腹立たしい現代的改悪だ。

十一月の京都観世能は、めずらしく初番が「山姥」だった。〈雪月花之舞〉の小書がついてゐる。五番目物の夢幻能で、切りに演じられる作品だが、この度は故片山博道師十三回忌追善の意がこめられている。遺影が飾られ、焼香する人の姿があつた。観世会館から毎月発行される気の利いた小冊子

『能』に「小書の話」が書かれていた。

「山姥」には〈白頭〉〈雪月花之舞〉〈長杖之伝〉〈二重座〉〈杖之拍子〉という五つの小書があるそうだ。今回の〈雪月花之舞〉は「法会之能式」、追善能の時に行われ、脇能の扱いをうけて初番に据えられるとある。

山姥の山めぐりを曲舞くせまいに作った有名な遊女ひやく百ま山姥が、善光寺詣でをする。けわしい上路あげろの山中であたりが暗くなり、宿をしようと声をかけた女の家にはいる。その女は山姥の霊鬼であった。山めぐりを舞って名をたてながら、自分への供養を心につけぬ百ま山姥に恨みをいいにきたのだった。

品のいい装束。ひそやかさとあわれさを含むさびしい面。山姥は百ま山姥にたずねる。「まことの山姥をばいかなる者とか知ろしめされて候」と。

百ま山姥の答。「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ。」

山姥は「鬼女」といわれて、思い耐えぬがにうつむく。「鬼女とは女の鬼とや、よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならばわらはが身の上にては

さむらはずや。」

夜すがら山めぐりの一曲を歌ってくれたら、自分もまことの姿をあらわして移り舞を舞おう。そういつて山姥はいったん消える。

間の狂言方が山姥の正体をあかこうかと荒唐無稽な話を語る。山中にあるぼろけた社の古い鰐口わにぐちの口が口となり、目はどんぐり、鼻はくるみ、耳は茸、頭に葛かつらがなる。大山のなだれ集った松脂まつやにが鰐口頭ところび合ってそこに塵芥がついて大きくなったものが山姥。また、山姥は山中に建てた総構えの木戸、いったん建てたが放っておいたため扉がくさってそれだけ残った柱に苔が生え、目鼻口耳足手が付いたものだという噂。最後に「野老ところ」。山の芋が髭ひげを白髪に、しだいしだいに目口耳鼻足手が付いて山姥になる……。

とてつもないものが山姥に変化する話は、いかに昔でも、とっぴ過ぎるような気がする。けれど、しんしんたる深山の山気が感じられる想像である。とくに山の芋など山中での生存には欠くべからざる食物であろう。柳田国男

の論文には、「山人は此島国に昔繁栄して居た先住民の子孫である」と、心からの敬意と惜愛とをもって山人の姿がとらえられている。「山人外伝資料——山男山女山丈山姥山童山姫の話——」では、山人を歴史的に五期に分けた。

第一期は山城遷都の頃までを「国津神時代」。第二期は鎌倉開幕までを「鬼時代」。第三期は江戸時代のはじめまでに及ぶ「山神時代」。第四期はその価値を狒々ひひの次に置く書が多いとして「自分は涙を揮なみだつて之を猿時代と名づける」とある。そして「近世の山人」となる。

天孫族は土着の住民の抵抗する者を土ぐも、邪鬼としてほろぼし、素直に従う者を国津神としたが、なお各地方には先住民が支配者文化とは異なる生活をしていた。支配権力が力を増し各地への武力弾圧や支配を強めると、まつろわぬ人びとは奥地山地に追ひ込まれていく。都人や里人からは、その敏捷さ、剛毅さ、そして野性的な生活を、「鬼」とおそれられた。

長い間には、弾圧や掠奪とはちがった形で山人と里人との交わりがあり